

保育をつなぐ

～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～

Vol.4

学級・学年を超えて
子どもたちと
かかわる中で



栗原妙佳



シリーズ「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信」では、子ども・保育者・保護者がつながり、共に生き、共に創り、共に育つことを目指し、本園をめぐる多様なつながりを視点に発信する中で、保育を見つめ直していきます。

シリーズ第4回は、学級や学年の担任と連携して園全体の子どもたちとかわる教諭からの報告です。本園では「全体フリー」教諭と呼んでいます。毎日の保育では、学級や学年を超えた広い視野で、子どもたちとの生活を支えてくれています。記録のための写真を撮り続け、その写真は園内研究会や日々の記録に生かされ、保育後に職員室で写真を見ながら語りあう姿が日常になっていきます。園生活において、多様な立場の大人と出会えることは、子どもたちの個性が大切に育まれるために大きな意味がありますし、担任の子ども理解が広がり深まるためにも欠かせない存在になっています。

栗原妙佳（くりはら たえか）
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

*

クラス担任とは違う立場として

私は本園で全体フリーとして勤務し3年目となります。以前勤めていた園ではクラス担任をしていたので、全体フリーの保育者の動きは見ていたものの、実際に自分がそのような立場になり動くのは本園が初めてでした。

各保育室、園庭、お山、遊戯室、廊下など、子どもたちは登園すると、毎日思い思いの場所遊び始めます。各担任保育者がクラスを運営しながら感じていることや、クラスの子どもたち一人ひとりに対してもっている思いをくみ、全体フリーとして、担任とは違ったかわり方をしながら一緒に子ども理解をしていきたいと思いつながりながら、どのように動けば子どもたちと担任をつなぐことができるのか試行錯誤の日々です。

B児の馬作り

5歳A児に、「馬が作りたと言われたことがあります。A児の話を聞きながら、イメージのものを作ろうと材料を選びに行くと、A児は牛乳パックを選び、「これを足にしよう」と作り始めました。担任保育者と連携をとりながらA児の遊びを支えようと思ったのですが、足を作ると満足したのか、A児は違う遊びに行っていました。

A児の馬を見て、自分も馬を作りたいと言ったのはB児です。A児がもう使わないと言った牛乳パックをつなげたものを利用して作るのかどうかと担任保育者が提案したのですが、B児は一から自分で作ることを選び、ウマタという名前の馬を作りだしました。

B児は私がA児とかかわっていたことを見ているようで、ウマタが完成すると、「ちよつと来て。ウマタのいる場所に草を敷きたい

から」と言いに来ました。

「ウマタのおうちは硬いところじゃなくて草のふわふわしたところにしたいから、緑の大きい紙をちょうだい」という言葉を受け、一緒に材料室（さまざま製作用素材が置いてあり、子どもたちは、素材が欲しいとき、保育者と一緒に探しに行くことになっている部屋のこと）に行き、緑の紙を選びました。自分の足で、選んだ紙を踏みしめて感覚を確かめたものの、「でもこれじゃ、なんか違う。もう1回行こう」と再び材料室に行き、今度は緑色の不織布を取りました。

「色はこんな感じ。でも硬いんだよな」とつぶやいた後、いろいろ考えた末に、段ボールを敷いてその上に不織布を置きました。そして、「これだ」と満面の笑みを浮かべ、無事にウマタの居場所が完成したのです。ウマタは学期末にB児が家に連れて帰るまで、B児だけでなくクラスのみんなにかわいがられる存

在となりました。

私は、子どもにとって、担任保育者ではないけれどじっくり何かをしたいときに寄り添ってくれる、幼稚園の中で安心できる（ひと）でありたい、また、担任保育者にとつて、もう少し子どもに寄り添いたい思いがあらながらもその場を離れざるを得ないとき、その場を引き継ぎ、再び子どもと保育者をつなげる、ちよつと手の届きにくいところに気づいて動ける役割を担う存在でありたいと思っています。



写真記録と園内研究会

私が見た子どもの姿や、かかわった子どもたちの様子を他の保育者に伝え、つないでいく手段の一つとして写真があります。毎日、カメラを持ち歩き、子どもたちの様子を写真で記録していきます。

この写真は、一日ずつのフォルダに分けて保存し、保育者が各自のパソコンから閲覧できるようになっていきます。また、A4の紙にも一日ごとの写真を印刷し、ファイリングすることで、過去の写真も探しやすいうにしています。



砂場で一人の子どもが穴を掘っている写真を見ながら、「このスコップを持つ手には全神経が集中している感じがする」

「それにこの足の置き方、この足の使い方がC児にとっては力が入る格好なのだろう」。

バケツをいくつも抱えている写真を見て、

「今、D児は、バケツ(もの)を使いたくて

持っているというよりも、これを持つことで安心しようとしているのではないか？」

「この後、仲良しのE児に渡していたのを見た。(もの)を通して友達(ひと)とつながろうとしているみたい」。

ハサミを巧みに使いこなし、カバンを作っているF児の写真を見て、

「そういえばF児は3歳のとき、とにかくよく紙を切っていた。片付けになると、他の子どもたちも手伝ってみんなであちらこちらに散らばった紙を拾ったりもしたけれど、満足



いくまで紙を切り続けたことがこのハサミの使い方につながっているように思う」

「遊びの中でハサミの特性に自分で気づいたのね」。

これらは、週に1度行われる園内研究会の際、交わされたやりとりの一部です。

園内研究会では、事例を持ち寄つての事例研究だけでなく、保育の中で日々記録している子どもたちの写真を見ながら、保育者間で話をするも行っています。一日の写真を順番にプロジェクターで映し出し、一枚一枚の写真を見ながら、各自がその写真から感じたこと、その子ども自身のこと、写真を通して読み取れること、写真の前後の様子、子どもたちの遊びについてなど、自由に話をしていきます。

私が初めて写真を見ながらの園内研究会に参加した際、自分で撮つたはずの写真なのに、じっくり見ながら他の保育者の話を聞くこと

でその写真がまったく別の写真のように見え、その写真を撮つたときの情景が動きだしたことを鮮明に覚えています。

1枚の写真の中から、子どもものの心の動きや、からだの使い方、友達との関係性まで、こんなに多くのことが浮かび上がってきたり、その子どもを理解するためのメッセージが隠れていたりに驚きました。

写真を撮るようになって最初の約1か月、子どもの様子を見ながら、どういう写真を撮ればいいのか、どうしたら子どもの一瞬を切り取つた写真で担任保育者に様子を伝えることができるのか、悩み構えてしまつていた私でしたが、この研究会をきっかけに、写真を撮ることへの構えはなくなりました。

保育における写真記録

園内研究会で、何を意識して写真を撮つているのか？ と聞かれたことがあります。

その時、私は何も意識しないようにしていると答えました。実際に、保育中、片手でカメラを持って、子どもの顔を見ないで感覚だけで撮ることがたびたびあります。

自然な姿でいる子どもたちは、こちらが撮ろうと意識し構えることで不自然な動きや表情になります。

子どもたちの、ありのままの姿を撮るためには、写真を撮ったことに気づかれないようにその一瞬を捉えることが大切だと気づいたからこうした撮り方になったのだと思います。

保育をしていると、今日はこの子のこんな一面に気がついた、遊びがこのように展開していったなど、その場その場でいろいろ感じるので、その瞬間が積み重なっていくために、子どもたちが帰った後、一日を振り返ると、残念ながらその時の思いをそのままもち続けることができないことも多々あります。

そんなとき、写真記録に助けられることが

あります。私は本園に来て、フリーの立場で写真を撮り続けてきたことで、初めて保育に写真を撮生かすことの良さを知りました。

写真を通して、子どもたちの一瞬の時を捉える。一枚一枚の写真をじっくり見ることで見えてくる、子どもたちからのいろいろなメッセージに面白さを感じる毎日です。

私が撮った写真を見てもらうこと、また一緒に見ながら話をするので、全体フリーの動き方に悩んでいた私も、それぞれのクラスの子どもたちや担任保育者とつながれたように思います。

これからも、写真という〈もの〉を介して、保育の中で、〈ひと〉と〈ひと〉、〈ひと〉と〈ひと〉がつながりあえるように、コミュニケーションの一つとしての写真を一枚一枚大切に考えていきたいと思っています。